

くまざさ



“湖陵は、名門校といわれています
それならみんなで頑張ろう”

湖陵同窓会長 久本 甫

十年前、昭和から平成に変わったときは、一つの区切りを感じました。あと五ヶ月後に来る二十一世紀はどんなものでしょう。その日が来てみないと分りませんが年号のような劇的变化は感じられそうもありません。それよりコンピュータの誤作動で騒いでおります。一九〇〇年の世紀末にタイムスリップするのも面白いかも。いやそれより大戦直後の清貧の人生を体験する方がなお良いかも知れません。同窓の皆様、今世紀最後の同窓会総会にご出席いただき有難うございます。こゝで同窓会各支部の様子をお知らせ致します。十勝支部の総会は毎年三月下旬に行なわれます。今年は大雪のため本部からは誰も出席出来ず、誠に残念でした。会長は河崎弘氏（釧中三十二期）で二十年間の会長職です。東京は毎年四月中旬の土曜の午後からで、会場は当番期に任せられているので毎年変わります。会費は年会費を入れて一人一万円位。出席者は百名前後。支部誕生が平成二年。会長は三代目で小澤良昌氏（湖八期）。札幌は六月中旬の金

曜の夕方からで会場は昨年からはびエンペラーに戻って、会費は年会費を含めて一人四万円。出席者は三百名位。創立十三年目で三代目会長の佐川彰浩氏（湖三十二期）。三支部とも出席者の名簿が渡され、且つ住居に関係なく同窓であれば当日受付をします。総会のセレモニーは十五分以内で懇親会に力を入れております。（これは当たり前で料理を前に長々の話は困る）各支部で同窓会館の募金についてお願いをしますが、毎年出席している同窓は理解しておりますが、初めて出席した方は、全く知らなかったとか、又募金は既に目的を達成し終了していると思っております。現状が伝達されていない事には本部としても反省し、督促をかけた。他の方法を考えておりますが、各期の幹事さんにお願いがありません。趣意書、振込用紙、封筒、切手代等は同期の皆様へ送るためにお渡ししたものです。

先日の新聞に出ていました。「風曜日」のことが。退職金を注ぎ込んで障害者のためのバリアフリーホテルを建てた人の話が。男の夢と浪漫を感じる話です。やり残した仕事の完遂を願ってビールで乾杯!!



学校長 中村 暁三

「月ひいずるくくのほくすいにく」
と流れた途端、たまたま隣合わせた上品なご婦人の口から「あら、変わったのね校歌。」という言葉が漏れました。思わず私は「いえ、変わってませんよ。」するとご婦人は次の一節に耳を傾けながら「そうそう、これこれ。」と、こやかに微笑まれました。
七月五日の午後三時四十分頃、市民球場のスタンドでの出来事。ホームベース付近には、決戦進出を決めた部員が整列していました。立ち去るご婦人を目で追いながらきつと同窓の方だと思ひ、グラウンドの選手たちとの強い絆を感じたものです。
翌日の決勝戦は全校応援。球場全体が盛り上がる感動的な応援に支えられて見事優勝。応援に見えられたたくさんの同窓の方々の笑顔の中で、その一人であるPTA会長さんと感激の握手。
国立教育研究所が行った「世代別意識調査」の報告書を読むと、「五十歳代以上にとって学校は楽しい場所であったのに対し、四十歳代以下にとつて学校は楽しくない場所になっていることが鮮明に現れている」とあります。
「楽しい授業が多かった」「学校は休みたくなかった」「尊敬できる先生が多かった」などの回答率はその根拠になっているのですが、この報告を読みながら本校の場合には違った結果が出る。とすぐに確信しました。
球場での他校より断然多い同窓の方々の応援、いろいろな場面でお会いする卒業生との話などから、世代を問わぬ母校愛の大きさをひしひしと感じるからです。
固い絆で結び付く同窓会の応援をいただきながら、人のため地球のために活躍する優れた人材を育てるのが本校のさだめ。昭和二年制定の校訓「誠愛勇」に従い、湖陵生をこよなく愛し、文武両道の伝統を誠実に守り、勇気を持って学校改革に取り組む。そんな湖陵高校でありたい。
最後に、同窓会のみならずのご発展を祈念いたしますとともに、母校に対する今後一層のご支援を心からお願ひ申し上げます。

同期会便り

釧中30・31期本州ブロック
代表幹事 尾田 清

七十才の修学旅行

平成十年十月、恒例の全国同期会を二泊三日日光鬼怒川温泉で開催した。出席者は五十七名（うち夫人は十七名で年々増えつつある）であった。

羽田空港から近代科学の粋を極めた「海ほたる」ではしやぎ乍らの弁当昼食をとり、バスの中ではアルコールも入りと気あいあいのうちにホテルに到着した。

先発隊の段取りも良く、懇親会は葛西夫人の中国語による乾杯で、早々に盛りあがる。用意された二次会にも全員参加で唄に踊りに、特に津坂夫婦の息の合った唄と踊りのデュエット、熊谷夫人の素人離れの踊り、その他カラオケにダンスなど、とても昭和一行生まれとは思えぬ、ボケとも無縁の様な賑やかさである。

翌日の第二日め、先づは「華嚴の滝」へ、台風や長雨により、かつて観たことがない大瀑布の、滝しぶきで歓声があがる程のすばら

しさであった。次いで小雨を降る中を東照宮参拝、折しも修学旅行の四季で全国から中学生や外国人も多く行き交う中、寺ガイドの説明を熱心に耳を傾ける我が団体を誰か云うともなく「七十才の修学旅行」と…考えてみれば勤労作業のみで修学旅行どころではなかった青春時代なわけで感激もひとしおの様子、「日光観ぬ馬鹿、二度観る〇〇」とか云うが、世界文化遺産となるべき日本の神社等の参詣は年令に関係なく修学旅行の実感と石段の昇降等に体の不自由な者への、思いやりや友情の現れなど等随所に見られ、真に有意義であったことを当番ブロックの一人として心から喜ばしく思うと共に、次回は来年札幌での同期会には皆元気で再会できることを心から祈念して擲筆する。



海ほたるにて会員みんな



楽しい弁当昼食



日光東照宮前にて

卒業60周年と喜寿祝う 「釧中20会」が東京大会



昭和十二年（一九三七年）に旧制釧路中学（現釧路湖陵高校）を卒業した「釧中20会」が卒業六十周年と喜寿を祝う東京大会をこのほど東京厚生年金会館でなごやかに開いた。

和気あいあいだった釧中20会の東京大会
各地区の近況報告のあと、功労者として、早坂孝史さん（釧路）、猪瀬昇さん（札幌）、佐藤彦弥さん（東京）が表彰された。引き続き懇親会が行われ、それぞれ三分間スピーチで生活ぶりを報告するなど和気あいあい。翌日は「レストランシフォン」に乘船し東京湾を一周して楽しんだ。

H9・10・28(火) 釧新記事より

当番期紹介

湖陵二十七期 名塚優子

平成四年一月に北海道新聞にシリーズで掲載された「さる若者たち」という記事をご記憶の方もいらっしゃるでしょう。

そう、あの記事は昭和五十年卒業の我々二十七期生の物語だったのです。「H組メンバーの高校卒業後の姿」はそのまま「他の同期の仲間の卒業の姿」にもあてはまります。

約六割が市外で活躍し、地元においてもいなくても出身地釧路のこれからのまちづくりに関心を示し、我が子の教育問題に思いをめぐらしている私たちは、医者・事業家・技術者・設計士・営業マン・公務員・主婦等となり、それぞれの立場でしっかりと地に足をつけて人生を歩んでいます。

どちらかと言えば、おとなしい学年だったように思いますが、あの記事からさらに七年の歳月がすぎ、すっかり中年になり（あまり認めたくはない）、好むと好まざる

とに関わらず、世代交代の波にもまればじめているように思います。

何かと慌ただしい年代にはいり、平素はなかなか顔をあわせることもないので、平成七年に「こぶな会」なる同期会を結成し、札幌在住こぶな会員にも刺激され、数年に一度の集まりを開いて旧交を温めています。

なつかしき湖陵高校は、校舎も新しくなり、知った先生もすでに退職され、校門を入りする在校生の体格も、発する言葉も私たちの頃とは違うのですが、変わらぬ制服を見るといつのまにか心はタイムスリップしていきます。部活の帰りに寄った「照井」のおいしいパンの味、リフレッシュしている昼休みのNHKの食堂や近所のソフトクリーム屋、授業をさぼって応援に行った野球の試合、一生懸命作っただのに灯のつかなかった行灯行列、自分は負けても応援に熱の入った体育祭、保健室の井戸

端会議等々……

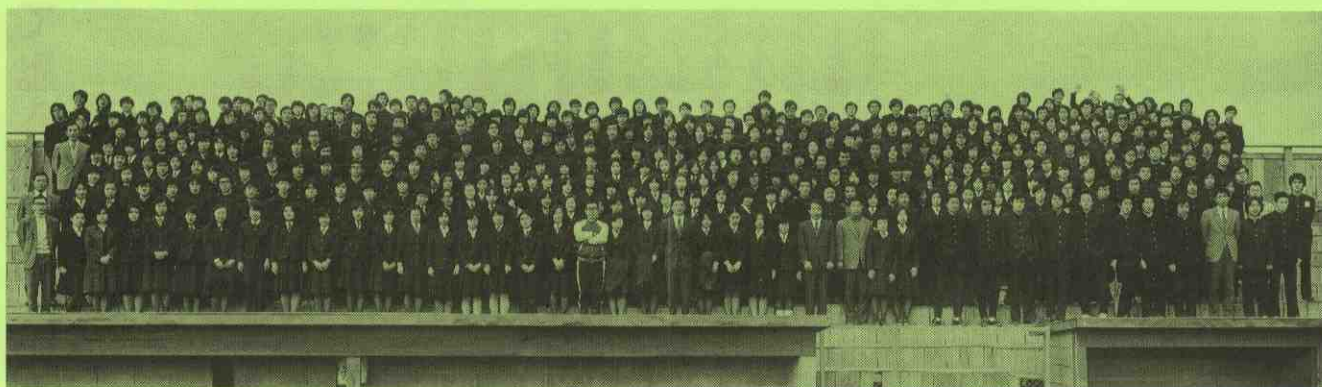
最近の「湖陵タイムス」を見ても、記事の内容は先生の紹介や部員大募集の部活紹介、4大行事（遠足・見学旅行・体育祭・湖陵祭）を振り返る等で、やはり根本は変わらないのだと感じたりしています。

卒業した昭和五十年頃は都市整備まっしぐらの時代で、私たちはチューリップやイルカの曲を聴きながら過ごしました。なつかしいチューリップの「サボテンの花」がリバイバルで流れている時、我が子と妙に話題があつたりします。なぜ、その曲がリバイバルするのかというと、私たちと同じ世代の人間が社会の中枢に入りだしているからではないかと思うのです。

人生七十年とも八十年とも言われ、自分らしく生きる時間も延長してきていますが、そのちょうど折り返し地点を過ぎ、体力的にはやや下降線ながらも、社会的には

次の世代を育成する充実時に入っていきます。皆、いつまでも健康に、自分を大切にと願わずにはいられません。

今回の同窓会は、七の期が当番期となりお世話をさせていただきます。例年の趣向を凝らした催しに負けないようにと皆で頑張りましたが、ご満足いただけましたでしょうか。十年、二十年、幾十年と齢を重ねても、学生時代の思い出は決して色あせることなく、同窓会場はまるで昼休みの教室のようです。また元気で同窓会でお会いしましょう!!





社会人となって

齋藤 昌平

平成十一年三月卒
(湖陵五十一期)

高校を卒業してまだ半年もたない私が社会人と呼べるかどうか分らないが、高校時代とは明らかに違う毎日を過ごしていることは確かである。高校一年生の頃は大学へ行こうと希望に満ち溢れていた自分がいつしか勉強をやらずに、遊びがちになり、進路の事を本気で考え出したのは高校三年生の夏でした。その頃は自分が今の仕事をしているなんて夢にも思いませんでした。

会社に入社してこの四カ月の間で、様々な新しい経験ができたと思います。それは一つ一つが今までに無い事ばかりで不安と緊張の連続です。

気軽に声をかけられる人がおらず、今まで会ったことのない人達ばかりがいる環境の中での生活に慣れるという事だけで四月の頃は精一杯でした。学生の頃までは、自分の周りにいる多くが、年齢の近い人でただ友人として接していけば良かったのですが、社会に出ると今までのようにはいきません。会社という組織の中でどの様に接すれば良いのか、こうした事は、

実際に体験してみなければわからない事でした。

仕事面においては、営業という場に配属されることになり、最初の頃はお客さんからの電話を取る事もできず、取ったあとも頭が真っ白になって何を話せばいいのかわからなくて心臓が破裂しそうでした。今ではなんとか取れるようになりましたが試験が一つまた一つと増えていき充実した毎日を過ごしています。営業という仕事はお客さんと直接会って話すことも多いので今の私の目標はお客さんとうまく話せるようになるということです。そして早く一人で外周りができるようになりたいです。

このように緊張することが多い四カ月でしたが右も左も分からないうでいる私が、どうか会社の一員として働いているのは、周囲の多くの方々の手助けがあったからだと思います。先輩方に教えてもらったりされる度に、私は感謝し、早く自分一人で判断し仕事をできるようにならなければならないと思っています。

私が一人前として働くことがで

きるようになるのは、まだまだ先になると思います。しかし、自分なりに努力して、いつか自分にしてきた先輩の様に、新しく入社してくる人に自分が教えてあげられるように成長していけたらと思います。

社会人 1年生

社会人になって思う事

三上 幸奈

平成十一年三月卒
(湖陵五十一期)

高校に入学してすぐ後、ある先生に「湖陵を最終目標だと思ふな、大学へ行くための通過点だと思ふ。」と強く言われましたが、私にとつては「湖陵に入る事」が最終目標だったので、進学する気はありませんでした。それでも一時期は進学しようかと迷いましたが、結局就職を選びました。

就職してもうすぐ四ヶ月がたとうとしています。持ち前のドジさで失敗ばかりの毎日ですが、「初めから完璧にできる人なんていないんだ」と自分を励まして日々頑張っています。学生から社会人になって感じた事は、自分がした事の一つ一つが大きな責任となる事です。今まで何も考えずに友達とワイワイ騒いで学校にいた時間が、会社に貢献できるよう、自分がもっと成長できるよう「仕事」をする時間になり、そのギャップに気疲れする事もあります。仕事内容は事務で、学生の頃にしてきた接客のアルバイトとは全く違う緊張感があります。あらためて「お金を稼ぐ」という事の大変さと大切さを

実感しています。

大学へ通っている友達を見て「楽しそうだな」と思う事はありますが、私にはやっぱり社会人として働く方が合っていると思うので「大学へ行けば良かったな」と思う事はありません。就職を選んで良かったと思います。

まだまだ社会人として一人前とは言えませんが、いつでも挨拶と笑顔だけは忘れないようにしています。このことは、当り前のようですが、慣れない場所だと精神的に余裕がなくて、なかなかできないものです。いつでも初心と基本と私らしさを忘れず、将来を見据えた生活を送って行きたいと思えます。



奥田達也(釧高二期)の

誠愛勇から

平川剛喜の巻

(釧中22期)



その時の同窓会長・組村真平を誘い、釧路新聞社常務の平川剛喜と帯広へ向かった。昭和五十六年春のことである。

当時、釧路新聞社は地盤の釧路・根室に「釧路新聞」、帯広に「北海道新聞」を発行していた。その東北北海道新聞に開校六十年を間近に控えた帯広中学・柏葉高校の歴史と同窓の人脈を綴った「帯中物語」を連載予定で、この帯広行は、「釧中物語」の執筆者でもある筆者を加え、柏葉一期卒の来海秀郎に執筆を依頼するためだった。柏葉高同窓会役員が集まった席で、来海から好意的な協力をとりつけ、ホッと胸をなでおろしたのはいうまでもない。

平川は、「釧中物語」の連載中、釧中二十二期の会合をセツトするなど裏方に徹していたことは知っていた。そしてまた、この帯広行でも来海の了解を得やすいよう同総会役員集めの段取りをするなど細やかな気配りを道中での会話から知り、驚かされたのである。

釧中に在学中は級長をした努力家と知っていた。福島高商を卒業し、雄別炭鉱鉄道へ入社した。戦時中は中支派遣槍部隊に現役入営し小尉に任官。終戦で復員、雄別炭鉱に復帰、後年同所副長を経て、

郷土紙の担い手として

役割り増す釧路新聞社長

と総務・人事・営業畑の出身であり、性格的には気まじめで、事務的な人物と思っていたのである。

新聞社は、編集(報道・整理)、営業(広告・販売)、事業(含出版)、制作(写植・製版・印刷)、総務(庶務・人事・財務)が一体となって運営されなければ経営として成り立つものではないとされているので、これを総括する責任は大きい。いま釧路新聞社の社長としてみると、平川の資質である細やかな気づかいが「郷土紙・釧路新聞の心」として浮びあがってくるのである。

釧路営業所長と永楽交通社長を兼ねた。

昭和四十四年、釧路市議選に立起して当選、釧中二十二期生では珍しく市政に携わった。雄別炭鉱の閉山で苦勞をしたが、そのバイタリティーには同級生も驚きをおくさない。夫人は釧路新聞社の創業者・片山睦三の妹である。さらに詳しくいえば、同期で一高、東大と進み、科学技術庁官房長となつた片山石郎の妹でもある。平川の業歴は、どちらかという

て、この地方の発展のため地方紙の使命達成に一層邁進していく決意であります。」と。

かつて明治時代の釧路は郷土紙が乱立した。そのような状況は、いまの新聞経営の厳しさからみて考えられないことである。しかし郷土紙の必要性は住民の自立精神の大切の基礎である。物の豊かさ、に溺れ、なんでも「官」に頼るくせのついた現代、テレビの軽薄な番組に踊らされて生活しては後悔する時が来る。

そんなことを思うと郷土紙の担い手として活躍する平川に声援を送りたくなるのは、ただ後輩としての私だけであろうか。

時の流れを民衆、住民の意思による流れに変えるためには、郷土紙を育て、我々の新聞にしていかなければならない。我々の意見発表の場とすることが自己主張を必要とする民主主義時代の郷土紙の姿でもあると考える。その担い手として、郷土紙の役割は増す一方なのである。

また平川は、現在、釧路地方の教育・文化の振興を図る財団法人、釧路教育芸術振興基金理事長や、来年の全国大会を控えた釧路市民憲章推進協議会会長として社会的にも活躍している。

全国紙といわれる新聞が日本全土を傘下に治めた世界でもまれな現状をとやかくいうつもりはない。ただ、地方分権の必要な時代を迎え、郷土紙が果たす役割を切実に一番感じ、いま真剣に取り組んでいる姿に打たれるのである。平川は「釧新五十年史」で次のように述べている。「本紙が『郷土』と定めているこの地方は、産業経済面で厳しい情勢にあります。本紙は、郷土の盛衰と運命を共にする郷土紙とし

釧路の郷土紙

釧路新聞

本社/釧路市黒金町7の3 ☎(0154)22-1111

東京支社/東京都中央区銀座1の14の14 ☎(03)3538-1313
札幌支社/札幌市中央区南1条西1の1 ☎(011)251-4056

根室支社/根室市鳴海町4の13 ☎(01532)4-2120
中標津支局/中標津町東1条北3丁目1 ☎(01537)2-2201
標茶支局/標茶町開運2の5 ☎(01548)5-3521

事務局だより

肌寒さを感じさせる今日此の頃の気候ですが、同総会会員の皆様におかれましてはご健勝にて毎日ご活躍のこととご拝察し申し上げます。また常日頃から同総会に対するご支援・ご協力を賜わり厚くお礼申し上げます。

さて、月日の経つのは実に早いもので、昨年の同窓会総会の思い出がまだ消えぬうち本年もその時期がやって参りました。今年度の当番期の十七期・二十七期・三十七期の皆様が、お互いに協力し、和気合々と準備を進めており、総会の成功に向け全力投球の毎日でございます。ほんとうに役員一同、心より感謝を申し上げますと同時に本年度の総会に多くの同窓生が集い、楽しい総会が開かれることを願うところでございます。

さて、皆様にはこのくまざさ、あるいはお願い文章などいろいろな方法で同窓会館建設資金のお願いをしておりますが、いまだ非常に苦戦をしております。おそれくこのくまざさをお読みになる方はすでに募金活動を終わられていることと存じますが、身近な方で同窓生がおりましたならいま一度お声をおかけ下さるよう是非ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員皆様のご健康をお祈り申し上げ、事務局からの便りとさせて頂きます。

北海道釧路湖陵高等学校同窓会館建設資金の募金協力をお願い



皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。さて私ども協賛会の念願でありました同窓会館が建設の運びとなり、九月末の完成を目指して募金のご協力をお願いしているところでございます。我々同窓生は勿論のこと在校生、そして今後湖陵高校で学ばれる後輩の皆様にも大いに活用していただくための会館でございます。湖陵の伝統にふさわしい会館をと念じておりますので、何卒ご協力を賜りますようくれぐれもよろしくお願い申し上げます。

平成8年7月2日
北海道釧路湖陵高等学校同窓会館建設事業協賛会会長 久本 甫
実行委員長 鈴木 豊 祐

● 寄付金の払込(取扱金融期間及び口座番号・口座名義)

- 1) 富士銀行 釧路支店 口座番号 普通預金 1501882
 - 2) 釧路信用金庫 本店 口座番号 普通預金 1103412
- 口座名義/北海道釧路湖陵高等学校同窓会館建設事業協賛会会長 久本 甫
- 3) 小樽貯金事務センター(郵便振替口座)
口座番号 02760-8-28524

加入者名/北海道釧路湖陵高等学校同窓会館建設事業協賛会
お問い合わせ/☎23-5151(内線6520)(関口)

『ご注意 期によっては独自にまとめている場合がありますのでお確かめください。』

編集後記

人の集まるところ大好きだから同窓会の総会は毎回出席しました。釧路一期の中川久平さんが会長のころはニュー東宝で昼間の大宴会です。呑兵衛の私にはたまらない魅力でした。貧乏でもたらふく呑めましたから。先輩にタカって。当番期のローテーションが分からなくなつては、釧路一期ということで良く当たりました。市議選の年回りで小冊子の広告、寄付を釧路二十一期の小船井武次郎さんにいつもお世話いただいたのです。「釧路物語」の新聞連載もこうした先輩達のおかげで続けられました。ひき続いての「くまざさ」にずっと連載記事を書かせて貰えたのも、そのせいと感謝しております。編集委員にさせていただきます、ますます調子に乗りました。

人脈のふえることは物書きとして、この上なく有難いことなのですから。

郷土史の古き、を先輩に学び、今の新しき、を先輩に教えていただける喜びは、執筆のネタをふくらませてもらえるだけでなく、伏流の味をより含畜のあるものにさせてくださいます。

若い方にも興味もって読まれる「くまざさ」へ改めていくよう努めますので、みなさんのご協力をお願いいたします。

(奥田記)

くまざさ編集委員会
同窓会会長 久本 甫
同窓会幹事長 関口 政
編集委員長 上岡 信明
編集委員 奥田 達也
" 石川 和男

